

大分県教育庁 高校教育課

エビデンスを基に課題を把握し、

指導と評価の一体化の実現に向けて全校を支援

大分県教育庁高校教育課は、2021年度、文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」の結果を踏まえて、「大分県英語教育改善プラン」の内容を大きく変更した。すべての県立高校で英語の運用力を測定する「大分県版英語4技能認定テスト」を実施し、その結果を指導と評価の一体化の実現に生かすべく、取り組みを進めている。

取り組みの背景

全国データとの比較から
英語教育の課題が浮き彫りに

大分県教育庁高校教育課（以下、県教育庁）は、2014年度、「大分県グローバル人材育成推進プラン」を策定し、グローバルに活躍する資質・能力を持つ児童・生徒の育成に、全県を挙げて取り組んできた。児童・生徒の英語力の育成と、教師の英語指導力の向上に焦点をあて、16年度には、「大分県英語教育改善推進プラン」（以下、プラン）を策定。以降、英語教育に関する全国の動向と県の実情を踏まえて、年度ごとに改善プランを策定している。

21年度の策定にあたっては、文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」の結果を基に、県の英語教育の状況を改めて分析した。すると、高校における「生徒の英語による言語活動時間の割合」は全国平均を上回っていた一方で、「パフォーマンステストの実施率、及び平均実施回数」「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の公表、及び達成状況の把握の状況」は、全国平均を下回っていた（図1）。グローバル人材育成推進班の佐野博紀指導主事兼課長補佐（総括）は、課題意識を次のように語る。

「全国平均との比較から、本県が指導と評価のうち、評価の面におい

て、さらに改善の必要がある実態が明らかになりました。全国平均を上回っていた生徒の言語活動時間についても、英語によるコミュニケーション能力を総合的に育成する言語活動を行うなどの一層の充実が求められます。そこで、授業改善に資する情報提供を積極的に行った上で、技能ごとに到達度を評価して、その結果を踏まえた授業改善を行うというサイクルを回す、指導と評価の一体化の実現を支援したいと考えました」

授業等の実践事例を共有し、
目指す指導と評価をイメージ

調査結果の分析から顕在化した課

題と、新学習指導要領を踏まえて、プランでは次の3点を最重要課題に掲げた。

- ① 英語4技能の育成を図る授業改善
- ② 指導と評価の一体化を推進するパフォーマンステストの実施
- ③ 「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の活用

その3つの課題を踏まえて、21年度のプランを策定した（図2）。その1つが、英語教育に関する先進的な実践事例の共有だ。県教育庁のウェブサイト「大分県教育庁チャンネル」で配信される公開授業の様子を撮影した動画や、県内の英語教師の共有フォルダに集められる指導・評価の実践事例を通じて、英語

4技能の育成のための授業や評価のあり方、目標設定や評価の方法などを学ぶという取り組みだ。

生徒が英語4技能を活用する言語活動と、生徒の学習改善につながる評価の事例、パフォーマンステストの実践を見て、新学習指導要領で求められている英語の指導と評価について理解を深めてもらい、指導観・評価観の転換を図るといふねらいがある。高校教育指導班の山本俊幸指導主事は、次のように語る。

「評価は本来、生徒の英語力を正確に把握し、さらに高めるために活用するものです。そして、先生方の指導の改善につながるものである必要があります。そのような評価の実



山本俊幸
高校教育指導班
指導主事
やまもと としゆき



佐野博紀
グローバル人材育成推進班
指導主事兼課長補佐(総括)
さの ひろのり

大分県 概要
県立高校数 普通科18校、専門科11校、総合学科2校、普通科・専門科8校、専門科・総合学科2校
県立高校生数 約2万人(全日制)

践に向けて、先生方が今求めているのは、理論や解説だけでなく、『具体的な実践事例』なのです」

英語4技能の評価に向けて

普通科・専門科の枠を超え、4技能の育成の重要性を周知

指導と評価の一体化に向けた施策として、21年度から「大分県版英語4技能認定テスト」(以下、認定テスト)を導入した。すべての県立高校の2年生が「GTEC」を受検し、

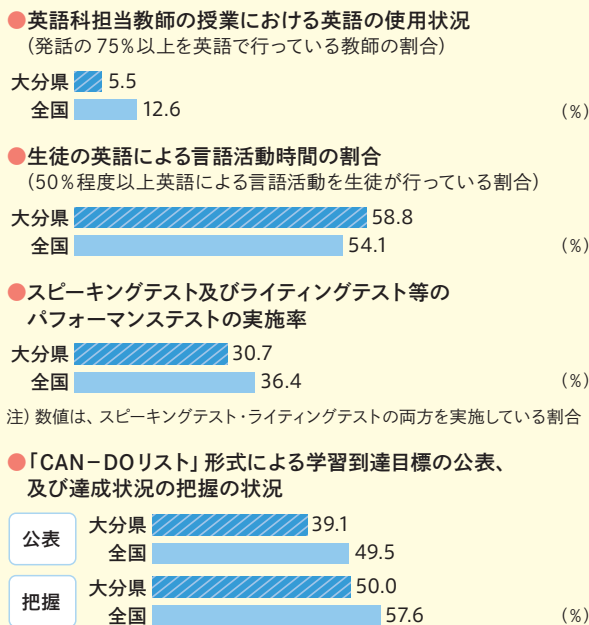
その結果から、各校が指導の成果や課題を把握し、授業改善を図ること、そして評価につながることをねらいとしている。

施策のポイントは、専門高校も含め、すべての県立高校を対象とした点だ。勤務校の学科を問わず、全教師が到達目標に基づく授業を行えるようにしたいという背景に基づいた施策であると、山本指導主事は語る。「これからの社会では、生涯にわたる様々な場面において英語を使うようになる」と予測され、未来の創り

手である生徒には、使える英語力、学び続ける力が求められます。高校教育においても、大学入試だけに目を向けるのではなく、すべての生徒の英語力を技能別に把握し、授業改善につながる仕組みが必要だと考えました。各校には、それぞれ校風や学科の特色があり、生徒の希望進路も様々です。そういった実情を踏まえて、これまでの研修等から一歩進んだ本施策が、生徒一人ひとりの英語力に還元されるものと期待しています。自校の生徒に卒業時まで

に身に

図1 英語教育に関する実施状況(高校)



注) 数値は、スピーキングテスト・ライティングテストの両方を実施している割合

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

図2 2021年度「大分県英語教育改善推進プラン」概要

- 1 高校教育研究英語部会との連携** 研究チームを設置し、指導・評価に関する協議を通して、効果的な指導・評価のあり方を研究し、県内に普及する。
- 2 「大分県発英語授業モデル」の開発・普及** 地域や学校・学科等の特色に関連つけた4技能を高める授業例(他教科の学習内容を積極的に活用し、英語を用いて課題解決等を図る授業など)を実践・共有。
- 3 公開授業の実施** 英語教育推進リーダーや指導教諭が中心となり、英語4技能を育成する効果的な指導を実践している授業を公開。
- 4 情報発信・共有** 公開授業の様子を「大分県教育庁チャンネル」で動画配信。県内英語教員共有フォルダで指導・評価の実践を共有。
- 5 大分県版英語4技能認定テスト** 県立高校2年生を対象として、生徒の正確な英語力を測定するテストを実施。各校が設定する学習到達目標の達成に向けた授業改善のPDCAサイクルに活用する。各校の取り組みを支援するため、県は英語科主任等対象の全体研修会を年2回実施。

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

につけさせたい英語力をイメージして、指導と評価を一体的に行えるよう、受検結果の活用を支援したいと考えました」

英語力を測定する意義を、佐野課長補佐はこう指摘する。

「観点別学習状況の評価や英語4技能の評価がどのようなものなのか、資料説明や実践事例の共有に加えて、実際に4技能を測るテストを受検することで、具体的にイメージでき、理解が深まると考えました」

パフォーマンステストに 熱心に取り組む生徒たち

認定テストの実施後は、多くの学校から前向きな声が寄せられた。「GTEC」のスピーキングテストはタブレット端末に音声録音する形式だが、熱心に英語を話す生徒を見て、「本校の生徒が、こんなに英語を話そうとしている」「英語が苦手でも真剣に取り組んでいる」と、パフォーマンステストの実施を通じて、生徒の英語学習への意欲の高さに気づいた教師も少なくなかった。

「特に、英語の運用力を測る資格・検定試験を初めて実施した専門高校

の先生は、予想以上に頑張つて英語を使おうとする生徒の姿に心を打たれていたようです。パフォーマンステストに一生懸命取り組む生徒の姿を目のあたりにすることで、指導と評価の一体化に向けたパフォーマンステストのさらなる実施と、英語4技能の育成を図る授業改善が一層進むことを期待しています。また、パフォーマンステストに取り組み生徒の頑張りを認めることで、生徒に達成感を持たせてほしいと考えています」(佐野課長補佐)

県教育庁では、認定テストの結果を踏まえて、全県の教師を対象とした全体研修会を年2回実施し、新学習指導要領に基づいた指導・評価方法についての理解を深める予定だ(図3)。外部アセスメントを実施するだけでなく、その結果を教育活動の改善に生かす仕組みを構築することが、本施策の重要な目的である。

「英語の運用力を測るテストの問題がどのようなものであるかを、『GTEC』を通じて知り、テストの結果を基に校内で授業改善について話し合うことを通じて、将来的には、先生方自身が、英語の運用力を測る定期検査やパフォーマンステストの

問題を作成して実施し、指導と評価の一体化を図れるようにすることを目指しています」(山本指導主事)

教育委員会の役割

現場のニーズに応じた 情報提供に努める

指導と評価の一体化に向けては、CANDORリストを活用した目標設定と達成状況の把握にも努める。

CANDORリストは、13年度にすべての県立高校が作成したが、現在の活用状況はP.20図1の通り課題があり、英語4技能の指導や評価に活用する意識を改めて喚起する必要がある。そこで、県教育庁は各校に、今回の認定テストの結果を基に、22年度の認定テストに向けた目標設定を求めるとともに、CEFRを踏まえたCANDORリストの見直しも進めてもらい、今後、各校のCANDORリストを取りまとめ、全県で共有する予定だ。

「文部科学省による英語教育実施状況調査では、英語力の到達目標をCEFRで示しています。認定テストの結果には、CEFRに基づいたスコアが示されるので、自校の生徒

図3 2021年度 認定テスト・全体研修会の流れ

| 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|----|----|---------|----|----------------|----|---|---|-----|----|---|---|
| | | 認定テスト実施 | | 結果返却 校内結果分析 | | 第1回 全体研修会 (10月末) ・「CEFRに基づいた学習到達目標の設定」「目標→評価→指導を一体化させる指導方法・評価方法」をテーマとした外部講師による講演と演習 | 各校での実践 ・学習到達目標の見直し ・パフォーマンステストの実践 | | | 第2回 全体研修会 (1月末) ・英語4技能の育成に向けた指導と評価に関する実践発表(外部講師) ・評価・指導の実践事例の共有(学校種ごと) | 各校での実践・検証 ・次年度の学習到達目標の設定 ・パフォーマンステストの実践及び検証 |

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

の英語力がどのレベルにあり、目標とするレベルとの差がどのくらいなのかを把握することができると考えています」(佐野課長補佐)

22年度の新学習指導要領の実施の前に、県教育庁には、多くの高校からCAN-DOリストやパフォーマンステストの実施方法、観点別学習状況の評価などに関する相談が寄せられている。県教育庁は、それらの課題に関する情報提供や教員研修を行い、現場を支援していく。その際は、英語の運用力を測るための定期考査やパフォーマンステストの作問の仕方など、現場のニーズに応じた実用性の高い情報を提供する考えだ。

山本指導主事は、既に新学習指導要領が実施された小・中学校の英語教育の状況を踏まえ、高校の英語教育に次のような期待を寄せている。「小・中学校で培った英語力を総合的にさらに伸ばしていくことが、高校の英語教育の責務です。今後、県教育庁として、小・中学校で行われている授業の実態や、児童・生徒の状況等の情報を高校に周知し、小・中学校と高校とが連続性をもって子どもの英語力をさらに伸ばしていくよう、先生方を支援していきます」

本校の英語教育

前向きなコメントを活用し、 自分の強みに目を向けさせたい

大分県立日田林工高校

林業科、機械科、電気科、建築土木科を擁する本校には、希望進路が明確な生徒が多く、学習にも意欲的です。専門教科・科目の授業で協働作業や自分の意見が求められる機会が多いため、生徒は英語の授業でもグループワークに活発に取り組めます。教師やALTは、生徒が自分の考えを明確に、正確に伝えることで味わえる喜びや達成感を深く得られるように、文法や表現の正確性にも重点を置いて指導しています。

今回の認定テストでは、「情報がどれだけ伝わったか」の面でのよい評価が出たことで、生徒も教師も、日頃取り組んでいる学習や指導の成果を感じることができました。また、もう少しでCEFRのA2レベルに届きそうな生徒が大勢いることも分かりました。ライティングの答案に書かれていた採点者の英文のコメントを和訳する課題を出したところ、生徒は皆、熱心に取り組んでいました。課題である文法や語彙を強化しつつも、生徒の強みをしっかり評価することで、より主体的に学習に取り組む態度を育てるのではないかと期待しています。

そのためにも、指導と評価の一体化が重要であると思っています。県の人事交流で中学校に勤務した際、言語活動やパフォーマンステストを日常的に行う中学校の状況を知り、本校でも積極的に取り入れるようにしました。今後は、普段の授業内容を、平日や週末の課題、パフォーマンステストを含む単元テスト、定期考査に適切に反映し、より透明性のある指導と評価の一体化に努めていきたいと考えています。

【お話を聞いた先生/外国語(英語)科教諭 高山満也】

4技能別の客観的な数値が、 生徒の学習意欲を高める

大分県立別府翔青高校

本校は、グローバルコミュニケーション科(以下、GC科)、普通科、商業科があり、GC科では、以前から「GTEC」を全学年で年1回実施しています。普通科と商業科では、今回の認定テストで初めて4技能を測定しましたが、スピーキングテストで英語を一生懸命話す姿が見られるなど、生徒は前向きに取り組んでいました。

両学科では、昨年度から英語の授業で言語活動を強化しています。例えば、帯活動として、1人が絵の内容を英語で説明し、その内容を基にもう1人が絵を描き、説明したことを英文に書き起こすといったペアワークを行っています。また、自分の意見を書く英作文では、パラグラフの構成の仕方などを指導してきました。認定テストでは、そうして培ってきたスピーキングやライティングの力が初めて客観的に示され、それが想定以上によかったことに、生徒は日頃の学習の成果を実感できたようです。英語を苦手と言っていた生徒が、「次のテストに向けて、授業を頑張りたい」といった振り返りを書いたり、授業で意欲的に発言したりする姿が見られています。

授業でのペアワークやグループワークの様子を見ると、自分の好きなことや考えを伝える言語活動が英語学習の動機づけになっていると感じています。そうした意欲は、生涯英語を学習し続けることにもつながると考え、今後も言語活動を一層工夫していきたいと思っています。

【お話を聞いた先生/外国語(英語)科教諭 門脇早苗、小野俊子、宮崎ゆりえ】